

社会学の視点から国家を考える

—— マックス・ヴェーバーとヘルマン・ヘラー ——

京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程 羅 太順

本発表の目的はヴェーバーとヘラーの国家論と方法論をめぐる比較を通して、国家を考えるにあたって、両者はなぜ社会学という視点を取り入れたかを明らかにすると同時に、根本的に基底する両者の方法論的相違を明らかにすることである。

従来においてヴェーバーの国家論と言え、ドイツ国家学の中でヴェーバーと親交のあるイエリネックとの比較が主に検討された。しかし、〈ヴェーバーとイエリネック〉というテーマは、国家を考えるにあたって社会的視点の導入の必要性が説明できない。この問題を受けて、本発表では、ヴェーバーと同じく国家論に社会学を導入したヘラーの国家論をヴェーバーのそれと比較検討することにする。

ヘラーはヴェーバーの理念型を批判する一方、その他の数多くの観点においてはヴェーバーと共通する姿勢をもっていた。両者はともに、自然法則の不変のものとしてではなく、文化的ないし社会的人間像をもち、それと同時に論理的体系性および法則性を固執する法実証主義に否定的であり、またともに国家を目的として捉えきれないとする国家観をもっていた。これらはヘラーがヴェーバーの方法論を否定するにもかかわらず依然として確認できる生々しい類似点である。これだけではない。ヘラーとヴェーバーはともに公法実証主義と歴史主義に批判的であり、ヘラーは現実科学としての社会学を、そしてヴェーバーは理解社会学を処方箋として提示する。

だが、本発表で主張したいのは、決してヘラーがヴェーバーの方法論を批判するにもかかわらず数多くの類似点をもっている「躊躇するヴェーバーリアン」であるということではない。むしろ、両者の間には類似点を凌駕する根源的な相違点があった。国家を考えるにあたって、ヘラーがゲシュタルトとしての国家を提示する一方、ヴェーバーはアンシュタルトとしての国家を提示する。こうした相違は、究極的には方法論的相違に帰着する。ともに「現実科学」としての社会学を提示する両者は、方法論的スタンスが異なるがゆえに、国家観だけでなく、「社会」観も異なっていた。ヴェーバーは社会それ自体を認識対象としなかった。ヴェーバーの理解社会学の中で認識対象となりうるのは、社会的行為、社会的関係など〈社会的〉なるものであって、決して社会それ自体ではなかった。一方、ヘラーの社会学においては、国家も、社会も客観的現実として存立するのであり、したがって、国家も社会もそれ自体として認識対象となるのである。

最後、本発表の意義について一言付言すれば、いずれも、歴史主義と自然科学的方法を批判的に継承した〈ドイツ社会学〉を基礎付け、国家社会学という新たな学問領域を開拓した二人の巨匠を取り上げる本稿は、草創期ドイツ社会学の意味解明的社会学としての独自の刻印を振り返りながら、「人間の廃棄」を代償として払う実証主義化するアメリカ流の社会学への批判を出発点とし、国家という分析対象が政治理論研究に収斂されつつある今日における日本の社会学の現状に些かなりとも注意を喚起しようとするものにほかならない。